柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 93 号

外国人が知っていた「日本」とは（1）=古代=

=====初めて日本を紹介したのは隣国、中国であった=====

前回 92 号では日本人が江戸時代初期に知っていた海外の民族や国々について、江戸時代初期の資料を基に考えてみました。今日のように情報の多い時代であったわけではありませんので、空想や伝説だけの思い込みや誤解もたくさんあったようです。それにしても、奇妙な民族がたくさん登場したことには驚きでした。

今回は、逆に、海外の人々が、日本人や日本をどのように認識していたのか、古代の資料をもとに考えてみたいと思います。 初めて、日本について記述した史料は、何と弥生時代の紀元前 1 世紀頃の様子を描いた、中国の歴史書「漢書(かんじょ)地理志」の中に登場します。内容は「楽浪(らくろう=漢が作った朝鮮半島に設置した郡の名称)(地図参照)の沖合に倭人が住んでいて百あまりの国に分かれていた。定期的に楽浪の官庁に挨拶に訪れ、物品を献じた」との記述があります。その後「後漢書」には「紀元 57 年に、倭の中の奴国(なこく)の使いが貢ぎ物を持って皇帝に対して挨拶に来た。そして組紐の付いた印をもらった」、更に「紀元 107 年に倭の国王が奴隷 160 人を献上し皇帝に挨拶を願った。その後倭国は乱れて、しばらくは中心となる主がいなかった」と記述されています。

次に有名な「三国志」の魏書(魏志)倭人伝には、3 世紀頃の詳細で具体的な日本の風俗・習慣について記述しています。これは、「後漢書」に記載されている内容に近いものですが、大変興味あるものですので紹介しましょう。

まず「男たちは大人も子供も皆、模様の入れ墨をしている。倭の海人たちが水に潜って魚貝をとるために入れ墨をして大魚や水鳥を威圧するのと同じ事である」「倭人の風俗は節度がある。男は皆、被り物無く木綿の布ではちまきをして、着物は一幅の布をそのまま横に巻きつけ結ぶだけである。女は布の中央に穴をあけ頭を通すだけの衣である」とありますが、ここに出てくる男性の衣服は、腰に布を巻き付けているようですが現在でも広く南・東南アジアで使用している腰巻き状の衣服と同類と考えられます。日本でも少し前には、女性の下着として同形態のものが使用されていました。一方、女性の着衣は、東南アジアなどでもよく使用されている貫頭衣と思われます。次に「赤い顔料を体に塗っていて中国人がおしろいを使っているのと同じである」という記述がありますが、先ほどの入れ墨と同じ効用をねらっているのか祭祀に関わるものなのか判明できませんが、使用されている顔料の成分が柿生の河川等で産出する水酸化鉄に由来するものなのかも興味あるところです。次に「動物の骨を灼いて吉凶を占う卜占を行い、灼いてできた割れ目をみて善し悪しを占う」の記述ですが、弥生時代の遺跡からは鹿の肩甲骨を灼いた形跡のある遺物を発見することがあります。現在も青梅の武蔵御嶽神社では 1 月 3 日の早朝、太占(ふとまに)神事が行われ、鹿の肩甲骨を灼き、骨の割れ目の位置から農作物の豊凶が占われます。

次に「下々の者が道で身分の高い人と逢ったときは後ずさりして草の茂みによける。伝言したり説明する時はうずくまったり膝をついたり両手を地につき敬う態度をとる。答えの言葉は`アイ`である」と記述されています。現代の日本人の挨拶の仕方に似ています。答えの`アイ`は現代語の`はい`」に大変近いですね。

以上、三国志の記述等を見ますと、今から約 2000 年前の日本人の姿や行動様式がよく見えてきます。それは、南・東南アジアの習俗との近似性や、今日の日本文化とのつながりも見えてきました。

（参考資料:「倭国伝」講談社学術文庫）　（文:板倉敏郎）

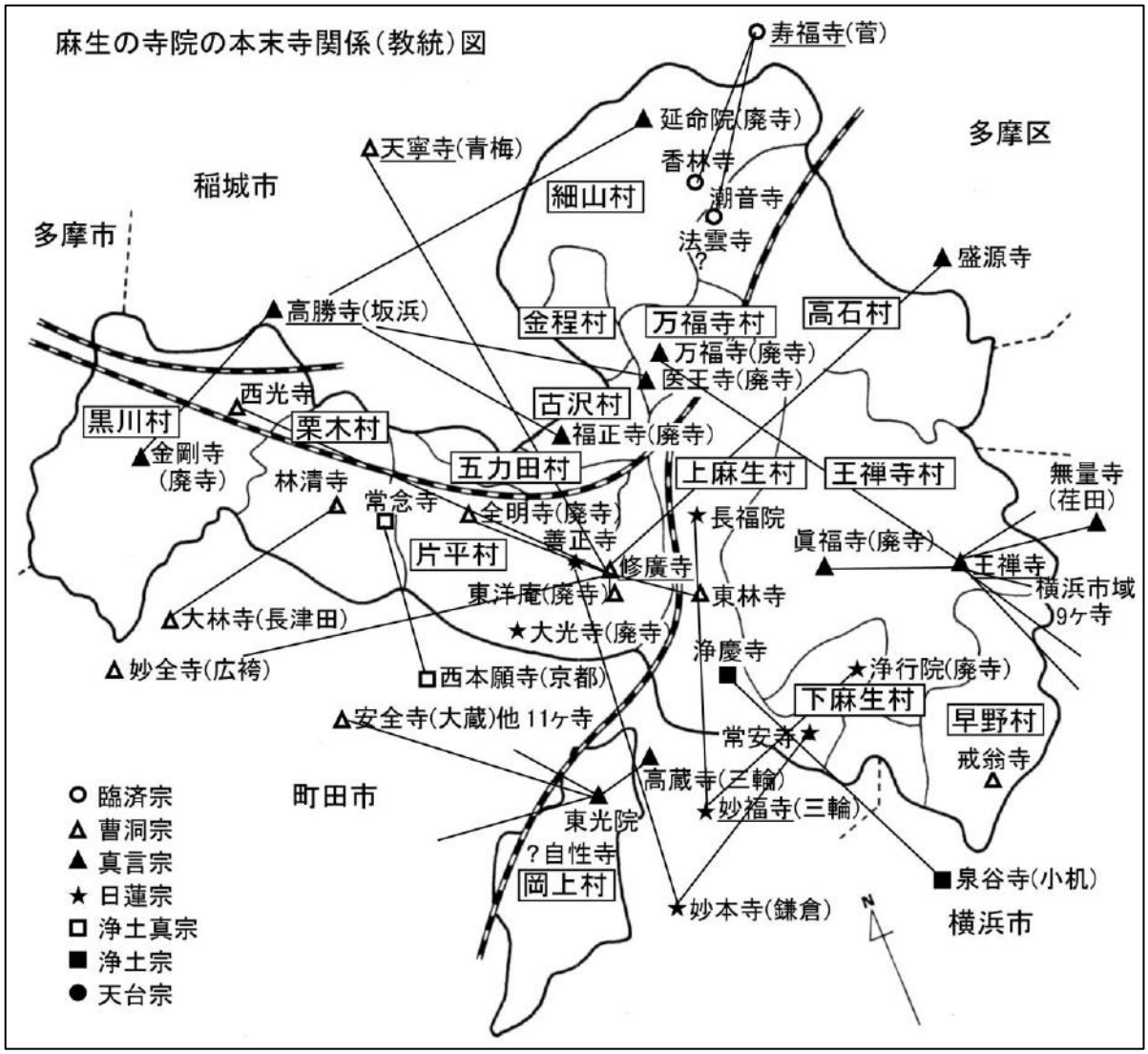
シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第 63 話

麻生の寺院(13) 宗派と教縁

小島　一也（遺稿）

新編武蔵風土記稿を手掛かりに麻生の寺を探ってみました(注)。そこでわかることは、麻生の寺の多くは室町時代末期（1400～1500 年代）に創建されているということです。飛鳥時代に始まり奈良平安時代、国家によって育成されてきた仏教が多くの碩学の僧を生み、鎌倉時代新しい仏教思想が興り、この室町期この地方にも農民の心を捉えた仏教が浸透して寺の出現となったもので、そのことは、この時期、農民の手による阿弥陀信仰の如来堂などがみられ、板碑（第 68 号 38 話）の造立が盛んだったことがこれを裏付けています。

寺の開創には、開山と開基があり、開山はその寺の仏法の開始者、開基とは寺の建設者を言います。新しい鎌倉仏教には宗派があり、開山は各宗派の碩学の僧で、曹洞宗、日蓮宗、浄土（真）宗、臨済宗と、それぞれの宗派の僧が教義を布教しております。開基は大別すると、農民による創立と、支配者（領主）による創建に分かれ、前者の多くは室町中期の創立で廃寺があり、後者は戦国時代領内安穏を願っての建立となっています。



これらの寺の由緒沿革は様々ですが、注目すべきは寺には教縁（教義普及）と言って本寺、末寺の布教の経緯を表すものがあり、麻生の寺の場合、その本寺、教縁が遠く市外に多く、現川崎市内には殆どないことで、このことは都筑郡と樹橘郡、多摩川と鶴見川、私たちの祖先の生活（宗教）文化の流れがうかがえます。（右図参照）

近年、寺社の境内には周辺の開発に伴い、重要な古碑や石仏が地元の人によって集められています。王禅寺境内に白秋の碑、片平善正寺には荻原井泉水の句碑、橋田東声の歌碑、また細山香林寺の五重塔は有名ですが、そこには聖徳太子を祀る孝養堂があります。多くの寺は境内社（稲荷社、八幡社、蚕影社、瘡守社、跡）を持ち、寺の境内が私どもの知らない文化財の場になってきているようです。

寺院と神社、現在麻生区内の神社は 13 社で、寺院のような宗派が無いように思われますが、それは明治 39 年、国の一村一社の統治令で多くの氏神様が姿を消したからです。それまでは33社（筆者調べ）以上の神社があり、氏神様とはその名の通り、地縁血縁の氏族が、五穀豊穣の神、戦の神、平和の神とそれぞれが異なった神を祀ったもので、寺院の宗派と似たところがあり、神社には必ず「別当寺」と呼ばれる寺が置かれたそうです。

それにしても、私たちは、現在の五穀豊穣、四海安穏、戦勝祈願を神に祈り、後世の極楽浄土、涅槃入滅を仏に祈ってきましたが、この草深い山村に遠い鎌倉・室町の昔、寺社が建てられたということは私たちの祖先の生活の歴史であり、改めて考えさせられるものがあります。（4 ページ目もご参照ください。）

（注）王禅寺・東光院・法雲寺は別稿 12 話・16 話・37 話参照。多摩美の妙延寺（昭和 44 年）、高石の匡真寺（昭和 56 年）は歴史が浅く割愛しました。

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「麻生区の神社と寺院」

シリーズ
時間と時計の話 第1部

和時計と西洋時計（7）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆からくり和時計の存在◆

このシリーズの第3回で、西洋のからくり時計に触れました。不定時法に対応した和時計を作り上げた日本の技術者たちは、からくり時計の製造にも挑戦し、見事に難しい課題を克服して、からくり時計を作り上げました。からくり人形は、17 世紀後半に大いに市中をにぎわすようになっており、江戸時代の文豪井原西鶴も、宴席で茶運び人形を見せられて、居合わせた人が皆、大いに感動した様子を綴っています。それゆえ、人形に施されたからくり技術の時計への応用は、ごく自然なことだったのです。西欧に比べ、当然時期的には遅れましたが、幕末には、いくつかの和式からくり時計が造られ、人々の注目を集めています。

◆飯塚伊賀七の時計◆

筑波研究学園都市にほど近い谷田部町（現在はつくば市谷田部）の住人飯塚伊賀七は、幕末に木製の大時計を作った人物として知られています。伊賀七は名主を務めるかたわら、和算・蘭学・建築などを熱心に学び、各種建築や地図の作成、和時計や各種からくり人形の製作、さらには飛行実験まで行って、村人たちを驚かせ、「からくり伊賀」と呼ばれて、村人の尊敬を集めた人物です。

五角堂

建築家としての伊賀七は、一辺が 4.7m（2 間半）の正五角形からなる五角堂を建設しました。この建物は現存し、伊賀七の遺品として彼の子孫の飯塚家に残る唯一の有形物になっています。内部は約 33 ㎡（約 10 坪）程で、中心部の高さは約 6m あります。外から見ると四角形に見えるのですが、堂内に入ると五角形であることが分かる作りになっています。

また伊賀七は酒買い人形や茶汲み女といったからくり人形も作っています。特に酒買い人形は、彼の家の筋向いにあった酒屋へ実際に酒を買いに行く優れ物でした。人形は酒瓶を持って道路を横断し、酒屋の前に来るとピタリと停まり、主人が酒瓶いっぱいに酒を注ぐと、ぐるりと向きを替えて家に戻るのです。これは酒屋の主人の話なのですが、主人がわざと酒の量を少なめに注ぐと、人形は帰ろうとしなかったそうです。伊賀七は人形に秤の機能も組み込んでいたのですね。残念ながらこの酒買い人形は現存せず、人形が持ち歩いた備前焼の酒瓶だけが、飯塚家に残されています。正六角形で高さおよそ 20cm、約 4 合（720ml）入りの酒瓶です。

こうした発明家の伊賀七は、文政 5 年（1822 年）に高さが 2m もある大型の和時計を作成しています。この時計は、太鼓や鐘を装備して飯塚家の敷地内の時計堂に設置され、日の出、正午、日の入りの時刻になると、自動的に鐘や太鼓を打ち鳴らすように工夫されていました。まさに自動時報装置付きの時計だったのです。また、時報に併せて飯塚家の門扉を自動で開閉する機能も持っていました。幕末の谷田部町は小さな村だったのでしょうが、伊賀七の大時計は公共の時計塔の役割を果たしていたのです。残念ながら伊賀七が天保 7 年（1836 年）に亡くなると、この大時計は厄介物の扱いを受け、時計堂は解体され、時計の部品は物置同然に使われていた五角堂に収納され、いつしか忘れ去られてしまったのです。

伊賀七の和時計

しかし、彼の時計のことは谷田部藩の記録に残されていたことから、昭和 60 年（1985 年）の筑波万博に協賛する形で、隣の谷田部町が「幕末の科学展」を企画した時、展示の目玉として計画されたのが伊賀七の大時計の復元・展示でした。幸い時計の部品は五角堂の梁の上にそのまま放置されていたため、失われた部分は少なく、何とか復元することが出来たのです。その後、平成 24 年（2012 年）に、伊賀七生誕 250 周年の記念展示のために、もう一度解体修理されました。伊賀七時計の文字盤は、1 日に 1 回転する文字盤と季節毎に交換する文字盤の二つがあり、時計とカレンダーの二つの機能を兼ね備えていたらしいことも、明らかにされました。
現在は谷田部郷土資料館と水戸市の茨城県立歴史館に復元模型（実物大）が展示されています。（続）

（参考）麻生の寺院一覧 【2ページ目からの続き】

宗　派	山号・寺号	創建年	所在地	本寺	備考
臨済宗	万松山潮音寺	永享年間 1429-41	高石	菅寿福寺	江戸時代　現在地に移転
曹洞宗	高石山法雲寺	不明（鎌倉期）	高石	不明	再建あり　阿弥陀如来像
臨済宗	南嶺山香林寺	文明元年（1469）	細山	菅寿福寺	香林坊　身代不動
真言宗	東光山延命院	慶長 3 年（1598）	細山	坂浜高勝寺	廃寺　祈祷僧伝承
真言宗	黒仙山金剛寺	応永年間 1394-1428	黒川	坂浜高勝寺	廃寺　毘沙門堂が残る
曹洞宗	雲長山西光寺	寛政 2 年（1461）	黒川	片平修広寺	創建時石段 98 段の高台　古寺
真言宗	金栄山医王寺	不明（応永年間）	万福寺	坂浜高勝寺	廃寺　本尊薬師如来像あり
真言宗	（不明）万福寺	不明（鎌倉期）	万福寺	王禅寺（推定）	古医王寺
真言宗	古沢山福王寺	不明（応永年間）	古沢	浜坂高勝寺	廃寺　寺跡石碑あり
曹洞宗	夏蒐山修広寺	嘉吉 3 年（1443）	片平	青梅天寧院	末寺 8 ヶ寺　大刹寅薬師
曹洞宗	寶壺山全明寺	不明（永正年間）	片平	片平修広寺	廃寺　修広寺三世創建
曹洞宗	（不明）東陽庵	不明（永正年間）	片平	片平修広寺	廃寺　修広寺の隠居寺伝
天台宗	（不明）大光寺	不明（鎌倉期）	片平	伝承眞光寺	新田義貞鎌倉攻で焼失の伝承
日蓮宗	妙永山善正寺	永正元年（1504）	片平	鎌倉妙本寺	開基は片平領主大熊氏
浄土真宗	稲葉山常念寺	永禄元年（1558）	栗木	京都西本願寺	町田市金井町より移転
曹洞宗	青谷山林清寺	明歴 2 年（1658）	栗木	長津田大林寺	開基は栗木領主岡野氏
日蓮宗	妙香山常安寺	永正 12 年（1515）	上麻生	鎌倉妙本寺	開基は麻生郷主小島佐渡守
日蓮宗	（不明）浄行院	不明（永正年代）	下麻生	三輪妙福寺	廃寺　開基は小島佐渡守
日蓮宗	（不明）長福院	享保 16 年（1756）	上麻生	三輪妙福寺	長福院講持ち 福島県石川移転
曹洞宗	麻生山東林寺	慶長 4 年（1599）	上麻生	片平修広寺	無住　名木 50 選イチョウあり
浄土宗	麻生山浄慶寺	元和元年（1615）	上麻生	小机泉谷寺	開基は領主三井氏　秋葉社付
曹洞宗	芳林山戒翁寺	天正年間 1573-92	早野	片平修広寺	開基は領主富永氏　殿様墓
真言宗	星光山真福寺	不明（推定鎌倉期）	真福寺	王禅寺	廃寺　本尊あざみ野満願寺
真言宗	星宿山王禅寺	延喜 17 年（917）	王禅寺	豊山派	関東の高野山　末寺 36 ヶ寺
真言宗	岡上山東光院	不明（平安時代）	岡上	真言単立	末寺 11 ヶ寺　市重文あり
不明	（不明）自性寺	不明（平安時代）	岡上	不明	古き寺なりと見ゆる～風土記
以下麻生区外					
臨済宗	仙谷山寿福寺	永徳 2 年（1382）	菅	鎌倉建長寺	香林寺などの本寺　義経伝承
真言宗	岩船山高勝寺	応安元年（1368）	坂浜	王禅寺	開山鎮海、等海上人の弟子
日蓮宗	長祐山妙福寺	明徳元年（1391）	三輪	池上本門寺	都文化財祖師堂ほか持つ

柿生郷土史料館2・3月催物案内 【入場無料】

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日 （原則として月4回）

2月 6・13・20・27 日（毎土曜日） **3月** 6・13・20・27 日（毎日曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時

第 10 回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展（3）
～ 関東大震災と横浜・川崎 ～

大正 12 年の関東大震災から 93 年を経て、震災の生の記憶が薄れてきました。そこで、当時の新聞報道から、被害の程度や対応を含めて、震災の様子を再現します。

期間：2 月 27 日 ～ 5 月 15 日　会場：柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！
ふるさと柿生の記憶を DVD 化
第 1 弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは資料館までお問い合わせください。